

第4回 書物の歴史 古代・中世 絵巻の表現

はしくち ころのすけ
橋口 侯之介



平安時代には、日本独特の書物が考案された。絵巻は、その美しさ、壮大な仕掛けなど魅力にあふれた書物である。とくにこの時間の流れが物語の進行と重なる書物の見せ方は、世界的に見てもユニークである。

巻子の発達

平安時代のはじめまでは、仮名文学も卷子本にしていた。11世紀になると物語は冊子にするようになったが、絵を交えたものは巻物にした。それが絵巻である。『源氏物語』に「絵合」という巻があり、左右にわかれて自慢の絵巻を競う会が催された様子がえがかれている。平安時代から言葉（詞章）と絵画によって構成された書物ができていたのである。卷子本で横に長い絵が描かれた。当時はそれをただ「絵」といった。ストーリーのあるいわば絵物語である。

日本独特の絵巻物文芸

絵入りの物語を卷子にしたのは、絵と詞書を組み合わせた手法は、一葉（一丁）ごとにめくっていく冊子形式より継紙にして巻いていくほうがずっと向いていたからだ。この絵が入ることの意義は大変大きい。絵の存在は必ずしも説明的ではなく、イメージを膨らませることが目的で、場合によっては作者の意図と関係のないところで絵が用いられていたりする。

絵巻の時空表現

絵巻を見るのは部屋に座って床ないしは低い机に巻物を置き、人の肩幅くらい（50～60cm程度）ずつ左側をスクロールしながら見ていく。右側も巻いて送り込みながら収めておく。最後に見終わったら、この逆にして戻していく。それは絵巻が時間と空間が右から左へ流れるように描かれているからである。時間の流れを追いながら、同時に空間の広がりも見せる特徴を持っているのだ。座ってこのように巻物をくくると斜め上の角度から見ることになる。絵はそれを計算に入れて、斜め上空から下をながめた**俯瞰**描写になっているものが多い。

巻物の大きさ（天地の寸法）は基本的に十二世紀頃から近世まで 30cm から 40cm くらいで、床に置いて座って見たときに人間の視覚にちょうどよい寸法である。



絵巻のよさはこれにとらわれずに左右

をもっと長く描くことも自由だ。大きなものを人が追いかける、大勢の人が群がっているさまなどは、横に広がると躍動感や迫力が出る。群衆が驚くさまをカメラが移動しながら追っていく映画的手法と同じである。

時間と同時に空間の広がりも見せてくれる。巻物を開いていく速度は、見る者が加減できる自由さがある。

12世紀に成立したとされ、奈良県信貴山朝護孫子寺(ちょうごそんしじ)に伝わった『信貴山縁起絵

巻』から。空を飛んで京都へ向かう護法童子を上空から描く。時間方向が逆になっていることでその異能力ぶりを見せている。強敵や恐ろしいものがやってくる時は左の方から迫ってくる。追いかける時は右から狙われる、というふうなのである。

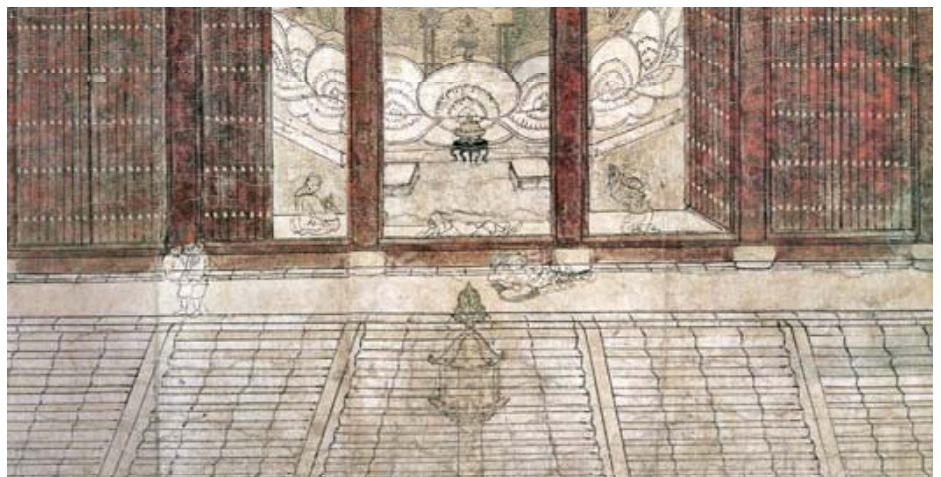


絵巻は、その美しさ、壮大な仕掛けにおいて他国に見られない魅力にあふれた書物である。とくにこの時間の流れが物語の進行と重なる見せ方は、世界的に見てもユニークである。有名な宋代の『清明上河図(せいめいじょうかず)』は都市の景観を余すところなく描いて壮観だが、空間軸が中心で時間軸がないので物語的展開がない。ヨーロッパの教会絵は物語性があるが、スクロールではない

異時同図法

さらに一枚の長い絵に同じ人物が二度出てくることが許されており、動きや時間の流れを表現する。これを「異時同図法」といって、絵巻ならではの手法である。一枚の長い絵に同じ人物が二度、三度出てくることが許されており、動きや時間の流れを表現する。平安時代の末にできた『伴大納言絵巻』では、けんかをしている子供を見た親がかけつけ、相手の子を蹴飛ばす。一方の子は母親が連れて帰る、という一連の動きを一枚の絵で表現している。子供のけんかに親が出るのは、響感をかうのだが……。

信貴山縁起では尼君が大仏殿でまどろむところと、思い立って信貴山へ出発するところなどを異時同図法で描いている。これが、日本のアニメーションの発達に大きく寄与したところ。



漫画の起源・画中詞

詞書のところは声を出して読む。当時は詞書が音読されたはずである。それが今日の映像作品のナレーションの役を果たす。今のアニメ映画に近い。

しだいに工夫がこらされて絵の中に文字を入れて解説したり、人物のせりふをいれる「画中詞」（がちゅうし）という技法も出てくる。

鎌倉時代の絵巻には、現代のコミックの吹き出しに相当する人物の発した声を書き込まれている。『天狗草子絵巻』は僧侶の傲慢を天狗にたとえて風刺した話だが、早くも画中詞が用いられている（右上、天狗姿の僧が「われら天くに…」）とっている。

これは江戸時代にさらに発展し、黄表紙などの冊子で絵入りの戯作に取り入れられる。漫画はこれをこま割りにした近代版。この形態は〈草〉の側のもっとも得意とする形である。



絵巻の伝来

平安時代に優れた作品ができた絵巻物は、以後の時代においても多数つくられてきた。室町時代も江戸時代においても多数製作された。しかし、巻物の不便さも認識されてきた。後世のために保存しておくにはそれでよいが、ふだんから鑑賞、読書するには扱いにくい。そこでさらに洗練された形として、冊子の奈良絵本へと発達していく。細密な極彩色の絵と美しい仮名文字で構成された物語の豪華な写本を奈良絵本というが、そのピークは江戸時代の17世紀後半である。これは上流の息女のための嫁入り道具でもあった。



江戸時代になると、物語よりむしろほかのジャンルで、絵巻にするのがふさわしい作品は、そう仕立てられた。折本に仕立てることもある。

書物の身体性

書物は「くくる」、「めくる」、「音読する」などただ目で追うだけでなく、五感を動員するという身体性もっている。身体全体を使って「読む」のである。絵巻は詞書がリズムカルに音読され、それが今日の映像作品のナレーションの役を果たす。絵巻の中の時空と、読書の時空とが鑑賞する人の身体によって一体化されていく。絵巻の身体性は大きい。書物を「読む」一辺倒でとらえてしまうと、このような使い方が見過ごされてしまう。

書物を「読む」一辺倒でとらえてしまうと、このような使い方が見過ごされてしまう。

EBookでも、頁をめくるなどの機能はあるが、そうした身体性をますますなくしてしまう。

本当に次世代の書物をつくるなら、こうした書物の歴史的積み重ねや身体性を生かすことを考えるべきである。紙に印刷された媒体がデジタル化するという形態上の変化だけでEBookを語ってはいけない。